

聖 書：ガラテヤ 4：1～7

説教題：「アバ、父」と

日 時：2012年12月9日

パウロはユダヤ主義者たちによって誤った立場に迷い出つつあったガラテヤ人たちにこの手紙を書きました。ユダヤ主義者たちの教えとは、イエス・キリストを信じる信仰だけでは不十分であって、真に神の民となるには、割礼を受け、律法を守らなければならない、というものです。その教えを受け入れ始めていたガラテヤ人たちに、パウロは、人が義と認められるのは、律法の行ないによるのか、それともキリストを信じる信仰によるのか、と問うています。

すでにパウロは3章後半で、律法は私たちに義を与えるものではなく、むしろ約束の子孫が来るまで違反を示すためのものであると言いました。パウロはそこで律法を二つのイメージで表現しました。一つは牢屋のイメージです。律法は私たちを告発し、監禁するようなものである。もう一つのイメージは「養育係」というものです。すなわち子どもが成人するまでのしつけを担当し、正しくないところを指摘し、鞭を使ってでも矯正・訓練する人です。行状の良くない子どもにとって、この養育係の下にあることは恐ろしいことであるように、罪人である私たちにとって律法は怖く、恐ろしいものです。しかしこの律法は、私たちを約束の子孫イエス・キリストへ導くために神が与えたものだ、とパウロは語りました。ですから私たちは律法から約束の子孫キリストへの信仰へと導かれるべきであって、その逆方向に進むべきではない、とパウロは語りました。そのことが改めてこの4章でも語られます。

まず1～3節は、律法の下にある状態についてです。1～2節：「ところが、相続人というものは、全財産の持ち主なのに、子どものうちは、奴隸と少しも違わず、父の定めた日までは、後見人や管理者の下にあります。」 子どもは、将来、全財産を自分のものにするという意味で、その主人であるのに、子どものうちは自由に使うことができません。未熟なため、後見人や管理者の指導の下にあります。この後見人や管理者は、養育係と同じく、少年の生活を監視し、指導し、訓練する人です。ですから父の定めた日が来るまでは、その子どもの状態は奴隸と少しも変わらないのです。

律法の下にある状態は、このような子ども時代の束縛状態にたとえられるとパウロは言っています。3節に「この世の幼稚な教え」とあります。「幼稚な」という言葉はもともとは英語のABC、日本語ならあいうえおといったアルファベットを指す言葉で、「初步的な」とか「初步的段階の教え」を意味します。律法は神が下さったものであり、もちろん尊ぶべきものですが、キリストにおいて示された神の完全な御心と比べるなら、やはり幼稚で初步段階のものと言わざるを得ない。パウロはこうして律法に戻ることは幼稚園時代に戻

るようなことだと言っているわけです。ユダヤ主義者たちは、律法を守り行なうことによって完成すると主張していましたが、パウロはそれは大人が初等教育に戻って、あいうえおの発音から習い始めようとする愚かなことだと言っているのです。

しかし、ついに定めの時が来て、神は約束の子孫を遣わしてくださいました。神はこの方への信仰に至るようにと律法を与えてくださったのですから、律法に導かれた者たちは、ついに現れたこの約束の子孫にこそ目を向け、信頼すべきです。

この4節5節には、約束の子孫に関する大切な真理がいくつも示されています。まずその一つは、この方は神であるということです。4節に神は「ご自分の御子を遣わし」とあります。御子とは神の御子ということであり、神であるということです。父なる神と同等同質の三位一体の第二人格の子なる神。その方が4節にあるように「女から生まれた」、すなわち人として誕生して下さいました。これこそ、このクリスマスにおいて私たちがあがめている神秘です。そしてこの方は律法の下にある者となって下さいました。神はどんなものにも束縛されず、拘束されない自由なお方なのに、人となって律法の下にご自分を置かれました。何のためでしょう。それは5節にあるように、「律法の下にある私たちを贖い出すため」です。「贖い出す」とは、奴隸状態にある者を、代価を払って買い戻し、その束縛状態から解放することを意味します。私たちはこれまで見て来たように、律法の下に閉じ込められていた者たちでした。そこから抜け出しができず、罪を犯した者として、律法ののろいの下に束縛されていました。そんな私たちを贖い出すため、御子はどんなことをしてくださったでしょう。その一つは、律法が要求する完全に正しい生活を私たちに代わって行なうことです。そのために御子は人となり、また律法の下にある者となり、律法の一点一画に至るまで、これを完全に守る生涯を送って下さいました。しかし私たちを贖い出すために必要なことがもう一つあります。それはすでに罪を犯した私たちのために、律法が要求する刑罰を代わりに受けることです。御子は地上の生涯の最後に十字架についてくださいり、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか！」と叫ばれました。神であられるお方が人となり、そのように叫ばれることまでして払われた犠牲は、無限の価値と力を持ちます。こうしてキリストは、完全な義の生涯と、十字架の死をもって、律法の要求を完全に満たして、私たちを律法の支配から解放してくださったのです。

その結果、と5節後半に続きます。「その結果、私たちが子としての身分を受けるようになるためです。」すでにこの祝福については3章26節で見ました。私たちは律法に照らして合格とされただけではなく、神の家族の一員に迎え入れられるのです。神の子どもという聖書のメッセージを考える時に大切なことは、神の子どもとは本来、イエス様お一人だけであることを覚えることです。私たちはそのキリストの子としての身分にまで結び付けられ、何とロイヤル・ファミリーの一員となるのです。神の家族の王子の位置にまで

引き上げられるのです。「子としての身分を受ける」という言葉は、「養子にする」という言葉ですから、もちろん永遠の昔から実の子であるお方との間には区別があります。しかし一方で私たちが覚えるべきは、だからと言って養子とされた者は、実子と比べて一段低い位置に置かれるのではないということ。1世紀のローマ世界において養子は実子と全く同じ特権を受けました。差別なく、同じ権利にあずかったのです。つまり私たちは子としての身分を受ける時、キリストが永遠の昔から父なる神の前に持つておられる御子の立場と同じ祝福にあずかるのです。そしてキリストが御父から永遠の愛で愛されているように、そのように父なる神の愛を受け、その祝福にあずかる者となるのです。

今日の箇所には、もう一つのことが語られています。6節：「そして、あなたがたは子であるゆえに、神は『アバ、父』と呼ぶ、御子の御靈を、私たちの心に遣わしてくださいました。」 神は私たちに神の子どもとしての特権を与えてくださいましたが、今度はこの素晴らしい特権を私たちが心から確信し、十分に味わい、楽しめるように、私たちの内側から働く御靈を与えてくださった。神は神の子どもという客観的な身分と共に、これを確信するための主観的な心情も与えてくださったのです。

この「アバ、父」という言葉は、幼児が家庭で父親に向かって呼びかける言葉です。「パパ」とか「お父ちゃん」といった意味の言葉です。公の場では使わない言葉。それだけ、それが使われる人々の間では、親しみがこもっている言葉です。そしてこの言葉で思い起こすのは、イエス様がこれを祈りに用いておられたことです。普通の人間が神に対して、このように呼びかけることは不敬虔であり、不謹慎であると思われていました。しかしイエス様は、幼児がその父に全幅の信頼と愛情をもって呼びかけるように、「アバ、父」と呼びかけられました。実際にそのように私たちも呼びかけることができるよう、御子の御靈が私たちの内にあって導いてくださるのです。

御靈はどのようにしてそのことをしてくださるのでしょうか。御靈の主要な働きは、何と言ってもキリストと私たちを結び付けることです。御靈は、キリストにあって私たちの罪が赦されていることを確信させてくださいます。そして私たちが父なる神に受け入れられていることを示してくださいます。そして私たちはキリストと結ばれて、キリストと同じ立場にまで入れられていることを示してくれます。そうしてついには神に向かって「アバ、父よ」と呼びかけることができるようにしてくださるのです。ローマ書8章15～16節：「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隸の靈を受けたのではなく、子としてくださる御靈を受けたのです。私たちは御靈によって、『アバ、父』と呼びます。私たちが神の子どもであることは、御靈ご自身が、私たちの靈とともに、あかししてくださいます。」

そして6節で「呼ぶ」と訳されている言葉は、「叫ぶ」という意味の言葉です。新共同

訳聖書はそのように訳しています。これはたとえば目の見えないバルテマイが「イエス様、あわれんでください」と叫んだ時の言葉と同じです。あるいはイエス様の十字架上での叫びとも同じ言葉です。つまりこれは強い感情のこもった言葉です。ですから、「アバ、父」と私たちが神を呼ぶ時、ボソッと疑いながら言うのではない。そうは思えないけれども、聖書にそう書いてあるから、とりあえずそう言ってみよう、などとよそよそしく発するのではない。声の大きさはともかく、私たちは確信をもって「アバ、父」と叫ぶのです。そのことを私たちは体験として知っているでしょう。心では全然そう思えないのに、形式的に「天の父よ！」と祈っているではありません。私たちは心からそう思って祈るのです。それは御靈の叫びなのだ、とこの 6 節は言っています。御靈が私たちの唇を通して叫び、私たちを導いてくださっているのです。ですから「あなたはもはや奴隸ではなく、子なのである。そして子なのだから、相続人なのだ。」とパウロは言うのです。

このような祝福を頂いているのに、これを感謝せず、律法に戻り、律法の行ないをして、自分の救いを勝ち取ろうとすべきでしょうか。それはあまりにももったいないこと、神のお心に逆行すること、愚か過ぎて悲しいことではないでしょうか。

私たち自身はイエス・キリストへの信仰によって与えられるこの特権に感謝して生きているでしょうか。それともこの特権に目を向けず、いつしか律法の行ないによって自分の義を勝ち取り、神の祝福を得ようとしているでしょうか。そのため奴隸のような歩みをしていないでしょうか。ガラテヤ人たちの愚かさに私たちも陥らないための方法は、パウロの言葉に聞くことです。自分が今やどのような者とされているかを知り、その真理に立って歩むことです。

神は、定めの時が来たので、このクリスマスの時、御子を遣わしてくださいました。その御子が地上の生涯において、私たちに代わって律法をすべて満たしてくださったので、私たちは今や律法から贖い出されています。そして子としての身分を与えられ、そのことを確信させる御靈まで内に頂いています。私たちはこの恵みを心から感謝し、このクリスマスの時、一層、御靈によって「アバ、父」と祈りの声を上げたいと思います。自分のむなしい義のわざにより頼み、恐れる奴隸の生活を送る者ではなく、キリストに信頼し、御靈によって、アブラハムへの約束に生きる神の民、神の相続人の恵みに満ちた歩みへ進みたいと思います。